陸軍少飛平和祈念の会、会報 No21 号

2020(令和 2)年９月

◎本会のＨＰは、http://sho-hi.sakura.ne.jp/　です。どうぞご覧ください。
◎次回の月例会は、１１月２１日（土）です。会場は、武蔵村山市市民活動センター、AM10～12 時です。ご予定をお願いします。
◎経費節減のため、会報をメール配信に切り替えています。パソコンのメールアドレスを、heiwakinen@sho-hi.jp までお知らせください。

（１）会費、寄付の御礼

前回会報に引き続き、会費及び寄付金のご支援が寄せられています。今後のビデオ収録、文字起こし、証言集の刊行のために使わせていただきます。ありがとうございました。

７月１４日から９月１９日の間、現金、為替振込、切手によって、会費と寄付金で、総額２４，０４０円の振込及び送金がありました。内訳は、７月１４日武蔵村山市の比留間誠一さんから会費と寄付で３千円、７月１８日鳥海賢三、嶋津隆文さんの会費２千円、８月２日少年飛行兵を研究している檜崎由美先生から５千円の寄付、８月５日１７期青木勇さんから１千円の寄付、８月１０日１７期杉本明さんから会費と寄付で１万１千円、８月２２日柏市の岸佳子さんから１千円の寄付、８月２９日青梅市の中部喜和さんから切手で会費１千４拾円、総額２万４千４拾円の収入がありました。（前回報告の７月１４日後）

９月１１日現在の会計状況は現金 70,680 円、切手 4,944 円、口座残高 92,838 円、合計 168,462 円です。

（２）元少年飛行兵のビデオ収録

元少年飛行兵のビデオ収録は、コロナウィルスの感染拡大により自粛してきましたが、７月から再開しました。７月２８日（火）１７期の瀬尾敏夫さんの収録を千葉県市川市の信篤公民館で実施。８月６日１７期の吉田金司さんの収録を九段の偕行社会議室で、８月２９日１５期甲の滝波登さんの収録を、町田市のご自宅で実施しました。９月２８日１７期の青木勇さんの収録を偕行社会議室で実施しました。今後のビデオ収録は、元少年飛行兵の方々のご承諾を得ながら実施する予定です。

（３）ビデオ収録の文字起こしと証言集続編の刊行について

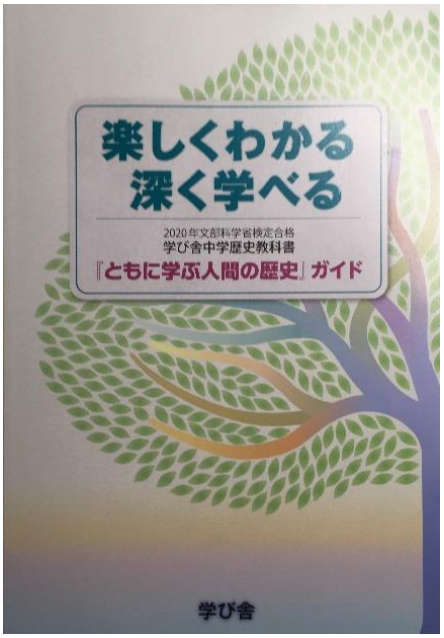
昨年度の予算で、８名分の文字起こしを NPO 法人 FJK（フォーラム自治研究）に依頼しましたが、８月末で１１名分の文字起こしが出来上がっています。現在写真や経歴を加えて、証言集の原稿案を作成中です。今後ご健在な元少年飛行兵の方々に見ていただいて修正等を行っていきます。

なお、ビデオ収録は続行中で増加しています。文字起こしに未着手のビデオ収録も１０本近く残っています。なるべく早くに予算等の状況をみながら次の文字起こしを行っていきます。証言集第二集以降の刊行は、必要な予算を確保して実施していく予定です。

７月会報でもお知らせしましたが、文字起こしは、一人当たり平均３時間で、武蔵村山市シルバー人材センターの見積もりは、１時間８千円と手数料でした。現在一人当たり２万円で予定していますが、あと１２名の文字起こしを行うとすると２４万円になります。また証言第一集の印刷費は 500 部で２７万円でした。あと４冊作る必要があります。目標として、来年度と再来年で、予算を確保し、証言集の刊行を終える考えです。

現在文字起こしを終了し原稿案作成中の方々は以下のとおりです。11 期の金崎豊さん、鈴木善雄さん、14 期の瀬戸山定さん、15 期乙の菊池乙夫さん、上野辰熊さん、北村彦四郎さん、16 期の後藤昭一さん、田中通義さん、17 期の佐藤昭さん、池田正義さん、杉本明さん、18 期の坂本幹雄さん、19 期の成迫政則さん。

（４）楢崎由美先生が共同執筆した社会科検定教科書のガイド副読本。



少年飛行兵の研究家で本会でも講演して頂いた楢崎由美先生が、学び舎の中学校歴史検定合格書のガイド本に共同執筆し、出版されました。「楽しくわかる深く学べる―ともに学ぶ人間の歴史」という中学校の歴史教科書で『人びとから拓く歴史』をめざすとしています。編集後記には「人びとの姿が、彼らが生きる歴史の現場が具体的であればあるほど問いが生まれ、この問いこそが学びの原点である」とあります。楢崎先生は少飛 15 期乙の 17 歳 2 か月で特攻死した荒木幸雄君の例をあげて少年飛行兵の事実を中学生に伝えています。歴史を人びとの生活や事件等から学ぼうとする素晴らしい取り組みと思います。

（５）詩文集「めぐり逢い」

新潟県の会員の加藤かよさんが「詩文集めぐり逢い」を出版されました。加藤さんは詩の会を主宰される傍ら、独自に少年飛行兵のことを調べ、知覧、万世飛行場跡はもとより、第 72 振武隊の少飛特攻兵のご遺族等多くの取材を重ねて本にまとめられました。巻頭の序文で相田みつお美術館相田一人館長は、『彼らの声を透明なガラスの棘のような言葉にして、加藤さんはそっと私たちに差し出しています』と書かれています。加藤さんは、少飛１５期乙の荒木幸雄君と同期だった本会の菊池副会長にも取材されたと伺っています。

「楽しくわかる深く学べる」「詩文集めぐり逢い」に興味のある方は、本をお貸し出来ますので、連絡をお願いいたします。

（６）少飛第１７期大橋健一さんから資料提供がありました。

川崎市にお住いの１７期大橋健一さんから写真のコピーや記録等、多くの資料が送られてきました。ありがとうございました。有効に活用させていただきます。なお大橋健一さんの投稿が「語りつぐ戦争」のサイトに掲載されています。以下の URL をご覧いただきたくお知らせいたします。

https：//www.asahi.com/special/koe－senso/

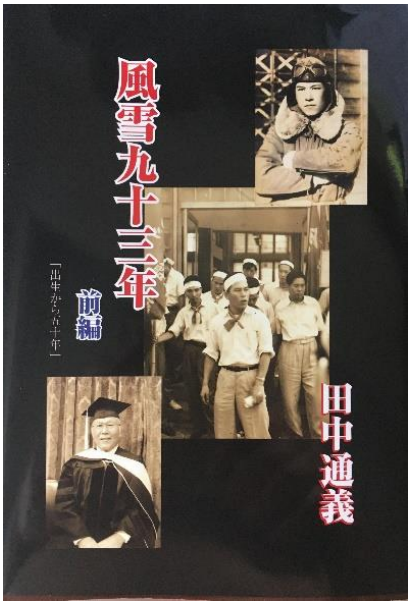
（７）少飛第１６期の田中通義さんのビデオ収録

コロナ禍が猛威となる直前の４月１４日、少飛第１６期田中通義さんのビデオ収録を実施しました。「出来るのか？」という不安と機会を逃したくない気持ちの間で揺れましたが、田中さんの快諾を頂いて、千葉県野田市のご自宅で約４時間お話を伺うことが出来ました。

以下冒頭の一部を紹介します。全体は、証言集に掲載します。

田中さんは誕生記念日だった令和２年２月２２日、自叙伝「風雪九十三年」の出版記念会を開きました。生まれてから小学生時代、少年飛行兵の経験と復員、英語を学び、外資系会社の勤務など、多様で波乱に満ちた生涯が描かれています。しかし少年飛行兵の記述は１０頁ほどで２５０頁の自叙伝のほんの

一部でした。今回のビデオ収録で、少年飛行兵のお話を詳しく聞くことが出来ました。少飛１４期乙、少飛１５期、１５期乙と１７期をつなぐ１６期の様子を知ることが出来たビデオ収録だったと思います。自叙伝は希望者にお貸し出来ますのでお申し付け下さい。



（神戸生まれ、家庭環境から軍隊を志望）

生まれは神戸市林田区、親父は長崎の出身で家族５人のうち４人が長崎生まれ、おとんぼ（末っ子）の私だけが神戸市生まれです。親父が長崎造船所から神戸の造船所に転勤したからです。小学校は神戸市立二葉尋常小学校。中学校は、再度の親父の転勤で東京の蒲田工業学校です。

昭和１８年４月、東京陸軍少年飛行兵学校に入校しました。当時、長兄は結婚して子供が二人、次兄は召集されて中支に行き、１年後に死にました。長女は、昭和４年に流行性感冒で亡くなっています。次女は、まだ結婚してなくて東京に一人で住んでいました。

私が生まれた２年後の昭和４年に母が亡くなり、その２年後に長女が亡くなっています。私は、親父の後妻との関係がうまくいってなくて、チャンスがあれば家を出たい思いでした。少年飛行兵への志願も、親父や長兄に相談することはありませんでした。

学校の朝礼で、「〇〇は陸士、〇〇は海兵に行った」と督励していました。配属軍人や校長、担任は、陸海軍の学校に行くことを勧めました。配属軍人と個人的に話したことはありません。面と向かって勧められて、その気になった人が何人もいたらしい。世の中が軍隊志向で、私も当然その一翼を担いたいという思いでした。海軍か陸軍か迷いましたが、陸軍飛行兵の制服の方が恰好良いといことで陸軍を選びました。１６歳の少年の迷いなんてそんなものでしょう。海軍に行かなくてよかった。行ったら死んでいたでしょう。

（大正生まれが乙種、昭和生まれは甲種）

昭和１７年に志願し、第一次試験は身体検査で、今の健康診断みたいなものでした。一次試験の合格通知は、私が郵便を懐に入れて親には知らせませんでした。二次の学科試験は１～２か月後、確か１０月頃でした。受験場所は東京の青山会館。受験生はかなり人数がいました。百名は下らない。神奈川の会場はなかったと記憶しています。試験は難しくはありませんでした。

昭和１７年の暮れに、翌年４月に入校しろという通知が来ました。親父に話したら「おっ、そうか」と無言でした。親父は明治２５年生まれの昔の人でした。私は親父の３５歳の時の子供です。でも心配だったのでしょうね、１８年４月に立川に入校する時は、次女と一緒に見送りに来てくれました。

鶴見の学友と二人で受験して二人とも合格しました。学友は大正１５年生まれ、私は昭和２年の早生まれなので学年は同じでした。ところが国家的にパイロットが消費されて、短期育成コースの乙種が作られ、大正生まれの学友は乙種になりました。昭和生まれの私は甲種とされました。その時に乙種の制度が始まったのではないでしょうか。

学校に入るまで知りませんでした。乙種になった鶴見の学友はすぐに行ってしまった。その学友とはそれ以来コンタクトがありません。死んでしまったのではないか。

（注）：１５期乙だった本会の菊池副会長の話では、昭和１８年４月に入学した１４期乙の少年飛行兵の場合、甲種、乙種が年齢によって区分け、線引きされたかもしれないが、昭和１８年１０月入学の１５期乙は、年齢による区分け、線引きはなかった。１５期乙の荒木幸雄君は、3月１０日の早生まれだったが乙種となり、１７歳２ケ月の特攻死となった。

（１５期生と半分ずつで１５中隊に）

入校時は、父と姉と３人で南武線中原から立川に行き、立川からバスに乗りました。父と姉は、校門のすぐ後ろの小さな待合室まででした。２～３組の他のグループもいました。そこで最後の挨拶をして、握手をしたかどうかはっきりしませんが、「元気でいます」と夕方頃に別れ、二人は帰って行きました。

一週間後、入校式がありました。日本全国、北海道や鹿児島からも来ていました。一週間で日本全国から来たわけです。全部で１千５百人くらいが１６期生となりました。その年に大津陸軍少年飛行兵学校が出来ましたが、大分の学校はまだ出来ていなかったようです。よく分からなかったが、徐々に分かってきました。

半年毎に入校するので、１７年１０月に入校した先輩の１５期生がいました。１５期生と１６期生の全員で、１５中隊３千人になりましたが、１～７中隊１千４百人と９～１５中隊１千４百人に分かれ、８中隊２百人は、１５期生と１６期生の混成となりました。

立川には昭和１９年３月まで、１年間いました。（以後略）

(注)：１６期までは、入校時には操縦、整備、通信に分科されてなく、全員が東京陸軍少年飛行兵学校で学びました。分科は１年後の卒業時に行われることになっていました。そのため、半年前に入校した１５期(甲)の人達と半年間一緒に学びました。同じ１８年４月に入校した本来なら１６期(甲)となるべき人で乙種になった少年飛行兵は、東京陸軍飛行兵学校ではなく期間短縮のため直接上級校へ行ったと思われます。乙種にされた人は、卒業年次に合わせて１４期乙と呼ばれています。

１８年１０月は、入学枠が拡大され、１７期生は入学当初から操縦、整備、通信に分科され、操縦が東京陸軍少年飛行兵学校、整備が大津少年飛行兵学校、通信は大分に行き、半年後に開設された大分少年飛行兵学校に入学し、３校に別れて学びました。同時に乙種採用となった少年飛行兵は、直接全国の上級校に入学し、１５期乙の少年飛行兵になっています。

（８）２０２０（令和２）年度の会費納入のお願い

◎今年度の会費納入をよろしくお願いします。会費は切手で納めていただいても結構です。
◎以下の送り先にお願いします。
〒151-0071　東京都渋谷区本町６－７－７
陸軍少飛平和祈念の会　鳥海賢三